編纂所だより

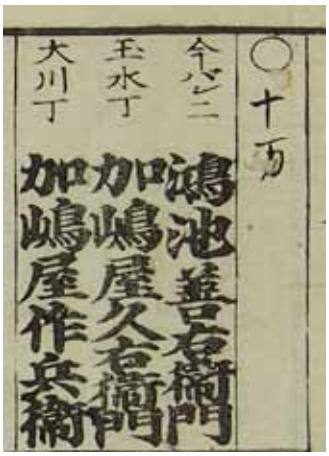
大阪市史編纂所（発行）　第 45 号　大阪市史料調査会（編集）
〒 550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2　大阪市立中央図書館内　TEL06-6539-3333

●二つの加島屋

江戸時代後期の大坂では、「持丸長者鑑（かがみ）」という一枚摺が頻繁に発行されました。『広辞苑』によると「持丸長者」とは、大金持ちや億万長者を意味します。つまり大坂の商人たちの長者番付です。

天保 14 年（1843）に出版された「大阪持丸長者鑑」を見てみると、筆頭には鴻池善右衛門が位置し、その隣に「玉水（たまみず）丁　加嶋屋久右衛門」「大川丁　加嶋屋作兵衛」と、同じ「加嶋屋」の屋号のお店が並んでいます。しかしながらこの二つの加嶋屋は、全く別個のお店です。

天保 14 年（1843）大阪持丸長者鑑（一部）　大阪市立中央図書館蔵



拡大図

まず玉水丁の加嶋屋久右衛門の出自は、加島屋広岡家。肥後橋の西で両替商を営んでいました。幕府御用を務め、全国各地の藩に対して大名貸を行っていました。明治維新後には、明治 21 年（1888）に加島銀行、同 35 年には大同生命を設立し、現在に至っています。さて大同生命創業において欠かせない人物が広岡浅子です。嘉永 2 年（1849）京都の三井家に生まれた浅子は、17 歳のときに加島屋広岡家に嫁入りします。加島屋を立て直し、大同生命を創業するなど、女性実業家として活躍しました。また女子教育にも力を注ぎ、日本初の女子大学（日本女子大学校、現日本女子大学）の創立にも尽力しました。広岡浅子については、古川智映子『小説 土佐堀川』でその生涯が描かれ、さらに NHK の連続テレビ小説でも取り上げられます。広岡浅子を中心に、幕末から明治期に至る加島屋広岡家の動向がドラマチックに描かれることでしょう。

一方大川丁の加嶋屋作兵衛の出自は、加島屋長田（おさだ）家。広岡家と同じ両替商であり、幕府御用も務め、全国各地の藩に対する大名貸も行っていました。さらに天明 3 年（1783）までは玉水丁に店を構えていました。また宝暦年間（1751 ～ 64）以降、幕府が主に大坂の町人たちから強制的に

借り入れた御用金において、幕府が指定した金額や実際に商人たちが納付した金額に関して、筆頭に鴻池善右衛門と加嶋屋久右衛門が位置し、加嶋屋作兵衛がそれに続くという動向を示しています。また長田家には、日蓮宗の寺院に寄進を行っている様子が見てとれます。身延山久遠寺の諸堂の修復料を寄付したり、大坂の雲雷寺への助成を行っています。神奈川県の藤沢市にある寂光山龍口寺の山門は、元治元年（1864）に竣工されていますが、雲雷寺の発願で長田家が行った寄進によるもののようです。

同じ玉水丁内で両替商を営み、同じように幕府や大名の御用を務め、同じ加島屋の屋号だった広岡家と長田家は、ライバル関係にあり、両家の手代は、加島屋本家であると主張し合い、決して良好な関係ではなかったようです。この状況に対して両者は姻戚関係を結ぶことで、関係改善が図られることもありました。江戸時代の大坂で、二つの加島屋は互いに強く意識し合いながら、共存してきたのです。

（松本　望）

●モノが語るお産の文化　―平野郷の奥野家文書から―

編纂所で調査している史料の大部分は、紙面に何らかの情報が記された、いわゆる「古文書」が基本ですが、意外なモノに出会うことが少なからずあります。

平成 26 年（2014）から編纂所が借用している平野郷の医家・奥野家の史料を整理していた時のことです。上書に「海馬」と書かれた包み紙を開けると、なかから乾燥したタツノオトシゴが出てきました。海馬とはタツノオトシゴの別名ですが、これはどういったもので、また、なぜ、このようなものが奥野家文書に含まれているのでしょうか。

乾燥した本物のタツノオトシゴ。子どものタツノオトシゴも同封されている。

タツノオトシゴが入った包み紙には「産難ノ時、手ニ握リ、又、身ニ帯サスレハ産ヤスシ」とあり、妊婦が難産の時、手に握るなどして使用することが記されています。ちなみに、『日本国語大辞典』（小学館）で「タツノオトシゴ」の項を繰ってみると「干してみやげ物とするほか、地方によっては安産のお守りにする」と解説されていました。このタツノオトシゴ、実は、雄が「出産」することで知られています。産卵するのはあくまで雌なのですが、雄の腹部にある育児嚢に雌が卵を産み入れ、雄がここで孵化させて出産するのです。雄にとっては一大事ですが、雌からすると安産ということなのでしょうか。

江戸時代に出版された書籍にも次のように記されています。『女重宝記』（元禄 5 年〈1692〉）には、難産の妙薬として「海に海馬といふ魚あり。この海馬を産婦の手のうちに握らすれば、難産なしといへり」とあります。さらに、貝原益軒著の『大和本草』（宝永 6 年〈1709〉）にも「乾シテ貯へ置テ、婦人ノ産スル時、是ヲ手裏ニ把レハ子ヲ産ヤスシ」とありますので、江戸時代には安産のお守りとなっていたようです。

では、奥野家との関係はどのように考えられるでしょうか。奥野家の遠祖覚舜は京都仏光寺了源上人の高弟でしたが、その後、文明年間（1469 ～ 87）西舜の時、還俗して本願寺から伝えられた産薬の調胎湯を広めました。この薬は「平野薬」と呼ばれ、平野名物の産前産後の薬として、世

に知られていました（『摂陽群談』「名物土産の部」）。調査中の奥野家文書のなかには、薬の調合を記したものなど、薬業関係史料が多く見受けられます。奥野家はまた、医師であったことから、出産に関わる医療の一環として、この海馬を使用して、治療にあたっていたことも想像できます。お医者さんが、調胎湯のような内服薬と「おまじない」の要素が強い海馬を併用していたとは、面白いですね。

古文書のなかに紛れこんだ、このようなモノ資料から、当時の出産に関する世界が垣間見えました。

もう一つのモノ資料。薬の袋等に印刷するための版木。左は「平野薬」とある。

（内海寧子）

◆新刊のご案内

『大阪市史史料』第 82 輯『「大大阪」の面影』

大正１４年（1925）４月１日、大阪市は第二次市域拡張を行い、全国第１位、世界第６位の人口と面積を持つ巨大都市となりました。いわゆる「大大阪」の誕生です。本書は「大大阪」をテーマに近代都市として変貌を遂げる大阪の姿を、都市論や言説、随筆、ルポなどを用いて多角的に捉えた画期的な史料集です。

本体 1,800 円　送料 実費

『大阪の歴史』第 83 号　特集 大坂の陣 400 年

大阪市史編纂所紀要『大阪の歴史』第 83 号では、大坂の陣から 400 年目の節目にあたる今年、大坂の陣をめぐる諸論文を収録しました。

【主な内容】

内田　吉哉「豊臣期大坂城南側の様相に関する試論
　—エッゲンベルク城所蔵「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観から—」
曽田めぐみ「描かれた大坂の陣—月岡芳年の錦絵を中心に—」
吉田　洋子「元和改元—徳川家康の国内平定宣言—」
小出　英詞「【史料紹介】島津誕生石物語について—島津氏と住吉大社—」

本体 700 円　送料 実費

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（市立中央図書館３階市史編纂所内・電話 06-6539-3333）までお問い合わせください。

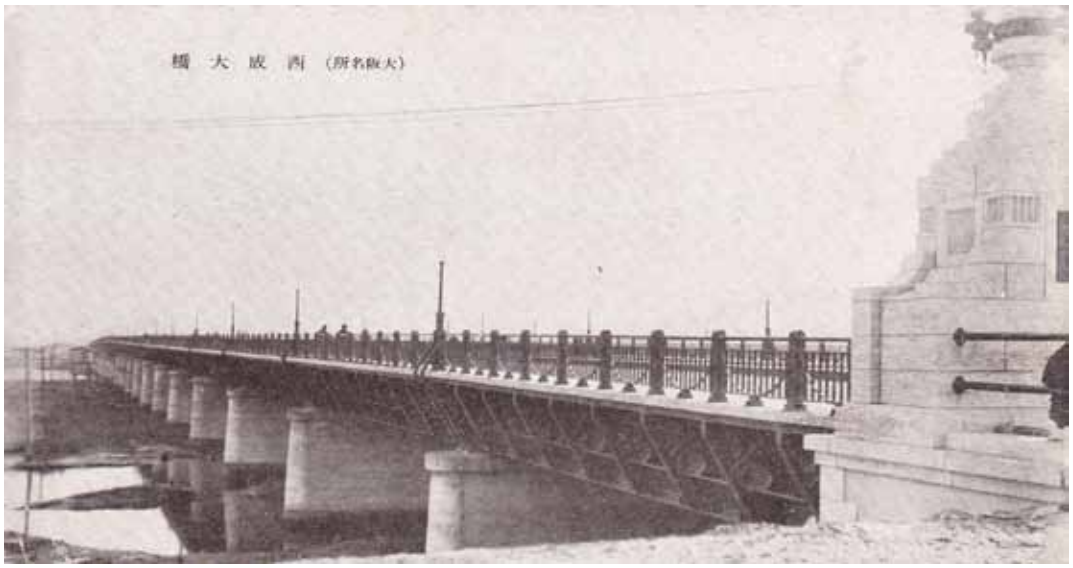
取り扱い書店：旭屋書店（天王寺ＭＩＯ店）、ジュンク堂書店（大阪本店・千日前店・難波店）、
紀伊國屋書店（梅田本店）

絵はがきでみる昔の大阪（23）

西成大橋（明治 41 年 12 月竣工）

西成大橋は明治 41 年（1908）12 月に竣工した橋で新淀川に架けられた橋です。長さが 782.3 メートル、橋の幅は約 5.5 メートルありました。明治 30 年（1897）に淀川の改修工事が始まり、明治 42 年に完成しますが、この工事では淀川の支流である中津川が蛇行していたのを直線化し、現在の毛馬の辺りから海まで一直線に河道を通しました。このため、新河道になったところは、田畑が川底となったり、集落の移転が行われたりしました。そして、できた新淀川は川幅が広いために、長大な橋が必要となりました。この時架けられた長大な橋は、上流から長柄橋・十三大橋、そして西成大橋だったのです。当時は西成郡鷺洲村海老江と西成郡歌島村野里に架かる橋だったので、西成大橋となったようです。

しかし、幅が約 5.5 メートルでは、時代に合わなくなってきたのです。明治末から大正にかけて、大阪の産業活動は活発になり、西成大橋の交通量も増大しました。荷車や馬車に加えて自動車が通るようになると混雑が激しくなり、橋の拡幅の必要が唱えられるようになりました。また、阪神国道の建設が具体化し、新淀川を渡る橋である西成大橋の改修も必要とされました。そこで、西成大橋を架け替え、橋幅の広い橋が新たに建設され（大阪市福島区海老江―西淀川区姫里間）、淀川大橋と命名されました。大正 15 年（1926）に完成しました。この淀川大橋は、長さ 724 メートル、幅 20.1 メートルで、旧西成大橋時代以上に尼崎方面と大阪市を結ぶ最も重要な橋であったのです。淀川大橋には、阪神国道電軌の路面電車（後に阪神電気軌道に吸収合併）が走っており、昭和 50 年（1975）まで阪神国道線として営業していました。　（堀田暁生）



★大阪市史編纂所では、ホームページを開設し市域の歴史に関する情報を発信しています。
http://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871　または「大阪市史」で検索してください。
今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、催し物や刊行物を紹介する「おしらせ」、「みんなの質問」では、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問と回答を掲載しています。
また、この「編纂所だより」のカラー版の閲覧とダウンロードも、上記ホームページより可能です。

「編纂所だより」は３月と９月の年２回発行し、大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民プラザ、大阪市市民サービスカウンター、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています（数に限りがあります）。大阪市立中央図書館（３階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。
(平成27年９月発行)